

富士火山展

富士山の地下構造に迫る

日本列島における火山は、人類が活動する時代の中で300を超えて生まれました。その中でどうして富士山は特別にみられるのでしょうか。日本一の高さを誇るからでしょうか。あるいは、自然、災害、信仰、芸術、生活など様々な分野で日本人が富士山から多大な恩恵や被害を受けてきたことからでしょうか。今回の特別展ではそのような富士山を火山としての側面から取り上げます。

富士山が魅了したのは太古の人々だけではありません。研究者や科学者も例外ではありません。近現代においても、富士山は謎だらけの山なのです。科学技術が発展したことで地球物理学や防災の面から探究すべき事柄が次々と浮かび上がってきました。

1. 富士山の地下構造はどうなっているのか
2. 富士火山の膨大なマグマはどこから来るのか
3. 富士火山の噴出物の特徴はどのようなものか
4. 「宝永の噴火」はどのようにして起きたのか
5. 富士火山はいつ噴火するのか



疑問を挙げればきりがありませんが、今回の特別展ではこの5つを取り上げたいと思います。

そもそも日本最大級の火山という魅力的な特性があるにもかかわらず、どうして研究が進んでいないのでしょうか。その一つに、1930～1950年代に数多く発表された津屋弘達つやひろみち氏による研究があまりに優秀であったために、後進の研究が途絶えてしまったことが指摘されています『富士火山 (2007)』。また、あまりに大きすぎる山体の調査には莫大な費用と時間を要するため、一研究者ではなかなか手を出せないことも一つの理由です。そして、1707年に発生した宝永の噴火以来、300年以上にわたって噴火を休止していることも要因の一つになっています。



図1. 宝永の噴火のイメージ図

しかしながら、近年では2000～2001年にかけて生じた低周波地震の群発、東日本太平洋沖地震の余震である2011年3月15日の富士宮を震源とする地震の発生、富士山の世界遺産への登録などを受けて富士山の噴火の危険性や防災対策に注目が集まりました。科学的な面では、2000年代に富士山の研究に再び光が当たり、最新の調査手法や近代火山学の知見を含めた議論がなされるようになりました。

今回の特別展では、富士山の地下構造に迫ることでわかるこの5つのテーマについて、近年の富士山の火山研究の進捗状況を通して紹介したいと思います。